

埼玉大学創立 60 周年を迎えて

埼玉大学同窓会記念誌



平成 22 年 10 月

埼玉大学同窓会連合会

目 次

記念誌発刊にあたり	埼玉大学同窓会連合会会長 杉 尾 彰 俊……1
創立60周年を機に、埼玉大学のさらなる発展を！	学 長 上 井 喜 彦……2
教養学部同窓会 けやき会の歩み	教養学部同窓会けやき会会長 棚 木 誠 ……3
同窓会に寄せる期待	教養学部長 高 木 英 至 ……4
文理学部から教養学部へ	文理学部（昭和40年卒）山 野 清 二 郎 ……5
教養学部創世記のころ	文理学部（昭和44年卒）関 根 増 男 ……6
円周率＝3	教養学部（昭和62年卒）折 原 茂 晴 ……7
埼玉大学創立六十周年を迎えて	教育学部同窓会教友会会長 清 水 章 夫……8
全国から注目される教育学部の方向性	教育学部長 山 口 和 孝……9
『シュウセン橋』渡りました	埼玉県師範学校（昭和15年卒）沓 掛 義 男……10
たった一度の箱根駅伝	教育学部（昭和37年卒）西 村 暢 二……12
経済学部と経和会の今昔	経済学部同窓会経和会会長 田 坂 敏 幸……13
六〇周年の現在と未来	経済学部長 伊 藤 修……14
埼大生として学んだこと	経済学部（昭和56年卒）館 逸 志……15
地学教室の歩み	文理学部理学科地学専攻（昭和42年卒）角 田 史 雄……16
化学同窓会の歩み	文理学部理学科化学専攻（昭和29年卒）横 澤 靖 夫……18
自分史的回想	文理学部理学科生物学専攻（昭和32年卒）永 井 良 徳……19
本物に出会い、人との関わりに支えられた学生時代	生体制御学科（昭和60年卒）関 口 い づ み……21
私と遊んでくださった学生さん達	数学科同窓会 奥 村 正 文……22
黎明期の研究室点描	工学部同窓会副会長 羽 石 操……24
還暦、そして大還暦	工学部長 佐 藤 勇 一……25
北浦和公園の思い出	理工学部（昭和46年卒）前 川 仁……26
埼玉大学創立60周年を機に	理工学研究科長 山 口 宏 樹……27
●インタビュー 兵藤 釗 元埼玉大学学長（現成城学園 学園長）のお話	経済学部（昭和60年卒）柳 澤 ひとみ ……28
資料 埼玉大学の沿革	……30

記念誌の発刊にあたり

埼玉大学同窓会連合会会長 杉 尾 彰 俊

埼玉大学創立60周年を記念し、長くその歴史を心に留め、また今後の益々の発展を願って、同窓会連合会として記念誌を発刊することは、大学はもとよりこの大学で教育を受けて育ち、社会の各分野に巣立った同窓会のメンバーにとつても大変有意義なことと思います。

昨年（平成21年）埼玉大学は発足60周年を盛大に祝い、その歴史の中で数々の努力により大きく成長し、また、現在、時代に即応した新しい数々の施策や研究開発機構を立ち上げ、力強い体質を構築して今後一層の飛躍的發展を見込む環境作りに邁進している姿は大変心強く喜ばしいことと思います。

この間、大学は多くの若人を教育し、有為な人材を次々と世に送り出しました。これらの人たちが努力し成長されて多岐に亘る分野で活躍し社会貢献されていることは、これもまた、大学はもとより、同窓会としても大変喜ばしいことです。

しかし、グローバル化して厳しい時間軸をもつて変化する現在の社会環境の中にあっては、止まることは許されず、持てる全ての力を結集して、さらに優位な体制作りとその実行を絶えず心掛ける必要があります。

大学に関わる全ての力を利用して多角的で広範な情報の集積と効果的発信、またそれに基づく的確な判断と迅速な行動が母校、埼玉大学の発展を支援する立場にある同窓会として、益々重要なことで、連合会・学部・学科各同窓会の結束のもとに同窓会の存在価値を高める必要があると思います。

目標基準設定のレベルにより評価そのものの絶対的判断は難しいとも思いますが、国立大学の評価ランクと財源配分ランクが公表され、恰もそれが大学の力とか存在安泰の順位付けの如き、見方も現れている昨今です。

人文科学、社会科学、そして自然科学の分野で先端的、独創的でイノベーティブな成果を挙げることを如何に保つかが評価の基準になると共にその大学が世に貢献する人材を如何に多く輩出させたかが大学のポテンシャルになると思う時、同窓会としてよく大学の考えを理解し、協調して効果的な支援ができるかを益々、真剣に学部を超えて同窓会の一体化を図って行くことも必要だと思います。

地域社会への同窓会としての貢献も欠くことのできない重要な側面と思います。これまでの施策を更に深めて行きたいと思います。

今後の伝統ある埼玉大学の益々の発展を祈念致します。

創立60周年を機に、埼玉大学のさらなる発展を！

埼玉大学長 上 井 喜 彦

埼玉大学は、ご承知のように、昨年創立60周年を迎えました。それを記念して、昨年1年間、記念式典をはじめとして様々な企画を実施し、各界の多くの方々から祝福の辞と今後の発展への期待のお言葉を頂戴しました。

60年とは、人生に喩えれば、還暦にあたります。そこで、ここで改めて本学の歴史を簡単に振り返ると共に、これからの大学の使命について述べておきたいと思います。

本学は1949年（昭和24年）5月、新制国立大学の一つとして、旧制浦和高等学校を母胎とする文理学部と、埼玉師範学校および埼玉青年師範学校を母胎とする教育学部との2学部体制で発足しました。その後60年の歳月を経る間に、文理学部から教養学部、経済学部、理学部、工学部の4学部が誕生し、教育学部と合わせて現在では5学部を擁しています。また、各学部の上には博士課程に至る大学院が設置されています。いまや埼玉大学は、500名近い留学生を含む約9,000名の学生・院生、460名強の教員、約230名の職員が学び、教え、働く中堅総合大学へと発展し、今日に至っているのです。

21世紀社会は、アメリカ合衆国初の黒人大統領誕生に象徴されるように、また日本における戦後初の本格的な政権交代に示されるように、いま大きな転換期に入っています。

とはいえ、転換の歩みは一進一退であり、日本の複雑な政治・経済・文化状況の中で、埼玉大学を初めとする国立大学法人は、きわめて不安定な位置に置かれています。今年度から始まった国立大学法人の第2期中期目標期間が6年後に終わるとき、幾つの大学が存続できる保証を勝ち得ているのか、まったく予断を許さないとも言われているのです。

こうした厳しい状況にあるなかで、埼玉大学の使命はどこにあるのでしょうか。本学は、創立60周年を機に、3つの基本方針を掲げました。その基本方針とは、「知の府」として普遍的な役割を果たす、現代が抱える課題の解決を図る、国際社会に貢献する、というものです。そして、すでにその具体化に着手しています。世界的な先端的課題に挑戦する〈脳科学融合研究センター〉と〈環境科学研究センター〉の設置、世界に貢献できる人材を養成するための〈グローバル・ユース〉という名の特別教育プログラムの開設、理工系の学部・大学院における〈世界環流型実践プログラム〉の開設、等々です。

また、一連の創立60周年記念事業を、学生の澁刺としたパワーと、これまで本学が蓄積してきた「知」のストックを地域と社会とに開放していく活動と位置づけて、展開しました。本学は、いま、このような活動を行うことも大学の重要な使命と考えています。

埼玉大学は、教職員はもちろん、学生、その御父兄、そして卒業生、そのすべての人々が誇りの持てる大学であり続けなければなりません。私は、以上のような取り組みを通して、本学は「知の府」としての存在感を格段に高めることができるものと確信しています。

埼玉大学同窓会連合会の皆さまには、本学のために多大なご理解とご支援を頂戴してまいりました。私は学長として常々感謝しております。皆さまには、埼玉大学の一層の発展のために、今後もひきつづきご支援・ご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

教養学部同窓会 けやき会の歩み

教養学部同窓会けやき会会長 榎 木 誠
中国文化課程昭和 45 年卒

旧文理学部人文学科の流れを汲んだ教養学部が第 1 期生を世に送り出してからすでに 40 年余の歳月を経過しました。人文学科時代の先輩たちと合わせると、その同窓生はすでに 6000 人を超える。埼玉大学に教養学部が誕生したとき、全国でこの学部名を冠していたのは、東京大学と国際基督教大学、帝塚山大学（2002 年に人文学部に改組）だけだった。そのユニークな学部名と新たな学問領域を目指す進取の気性に憧れてか、学生の出身地も北海道や東北、東海など全国各地に広がっていました。全国から学生が集い、学ぶ伝統は今でも受け継がれています。

人文学科の先輩と合わせて卒業生は今では 6000 人を超えるが、その“希少性”故に、「教養学士」は全国の大卒者はもちろん埼玉大学の同窓生の中でも極めて少数派です。しかし、「人文学科、社会科学、自然科学の諸科学にまたがる学際的な文理融合の教育研究を行う」「人間を探究し、現実の社会を分析し、多様な文化のありようを洞察する学問を重んじる学部」の性格そのままに、同窓生の多くは学問研究や教育の世界、国、自治体など行政機関、マスコミ、金融、製造業などの民間企業というように幅広い分野で活躍しています。

全国各地の各分野に広範に広がりつつある同窓生の人脈、有機的なネットワークを強化し、同窓生相互の親睦を深めることを目的に、教養学部の同窓会「けやき会」が設立されたのは、1991 年のことでした。当時の小松寿雄学部長はじめ諸先生のご尽力を得ながら産声を上げたけやき会は、同窓会総会の開催など同窓生の親睦を深める一方、学部と連携しながら学内での就職セミナーや就職相談会を開催するなど卒業生と在学学生を結ぶ活動を続けてきました。また、2009 年 6 月にはホームページも開設。会員相互のコミュニケーションを一層活発化させる基盤も整備しつつあります。

しかし、会の設立当初に掲げた目標からすれば、その一里塚に到達したに過ぎません。教養部制度がほとんど姿を消した日本の大学では今、「リベラルアーツ」の伝統が失われつつあります。そうした中で、皮肉にも教養学部を新設したり、「国際教養学部」や「現代教養学部」など新設や改組した学部「教養」の冠を付けたりする大学が、東海大学、放送大学、早稲田大学、東京女子大学など全国的に増えています。こうした傾向は、埼玉大教養学部の先見性を示すと共に、その存在感、学問領域での特性や独自性を一層高めるための努力が必要であることを示しています。

国立大学法人化によって国立大学の学問研究・教育の環境は厳しさを増しています。こうした中で、けやき会は、教養学部の歴史と伝統、希少な学問の府としての役割、価値をさらに高めるための大学や学部の取り組みに対する良きサポーターとして、同窓会活動をさらに活発化にしていきたいと考えています。

同窓会に寄せる期待

教養学部長 高 木 英 至

埼玉大学の創立 60 周年を記念し、同窓会が文集を作ると伺いました。埼玉大学とともに埼玉大学の同窓会が今後も発展することを期待しつつご挨拶申し上げる次第です。

教養学部は従来、同窓会に対してあまり積極的な立場をとって来なかったと思います。教員と卒業生との関係は少なからずあり、例えば教員の退官（退職）記念の催しなどには多くの卒業生を目にします。しかし卒業生との関係は主に研究室、あるいはコースごとに維持されているようで、学部として卒業生を集めるような機会はあまり持たなかったように思います。

教養学部全体の同窓会があまり意識されなかったのには、それなりの理由があったでしょう。教養学部には以前から、全国から学生が集まっていました。そこで、卒業生は大学周辺から離れた場所で次の生活を始めることが多かったと思います。卒業生の業種も多様でした。ですから、卒業生が同業組合のように形成されることもなかった、という事情があり、この事情は今も継続しているように思います。

卒業生との連携が強く意識され始めたのは、埼玉大学の国立大学法人化が近づいた頃ではないでしょうか。いろんな事情がありました。法人化を検討する過程で、外国の大学の様子が参考とされました。ご存じのように、米国の大学では同窓会にあたる組織が強力であり、大学の財政基盤の 1 つにもなっています。そうした姿をモデルとし、大学や学部の「応援団」を作りたいという気持ちも相俟って、全学的に同窓会の活性化が意識された、という経過であったように思います。

教養学部同窓会であるけやき会は、1991 年の設立ですが、教養学部の教員が同窓会との関係を盛んに議論し検討するようになったのは、法人化の前後だったと思います。時期を同じくして、当時のけやき会の武井会長、あの後を継いだ現在の榎木会長により、けやき会の体制も整備されてきました。教養学部では、現在、学生の進路指導を中心に、けやき会に様々なご尽力を頂いているところです。

大学が同窓会に期待する貢献は多数にのぼるものと思います。しかし現在の国立大学法人法の枠組みからいえば、最も重要なのは、実体的な便宜の供与ではなく、大学および学部に対し正しい評価情報を伝えてくださることであると思います。この大学、学部で学んだことが良かったのかどうか。今後伸ばして行くべき長所は何か。補うべき短所は何か。そうした点について、卒業生の方から十分な評価、ご指摘を頂けることが、われわれにとって極めて貴重であると私は考えています。

文理学部から教養学部へ

文理学部昭和 40 年卒 山 野 清 二 郎
埼玉大学名誉教授・鎌倉女子大学教授

埼玉大学は、発足前の歴史を含めると、三期に分けられる。現在の教養・経済・理学部（当初は理工学部）は、昭和四十年四月にそれまでの文理学部を改組して成った。文理学部という学部名は、今や歴史的名称となったが、当時はいかにも新制大学といった清新あふれる感覚の名で、その殆どが旧制高等学校を基として生まれ、それは文科・理科から成る組織ゆえの命名であった。我が文理学部の前身旧制浦和高は大正十年の開校、昭和二十五年三月に廃校となったが、埼玉大学は前年の二十四年五月に開学しているので、約一年間は旧制高と新制大学とが同居していた。文理学部は旧制高よりも短命で、二十年足らずで姿を消した。私は昭和四十年三月に文理学部を卒業している。校地は現在の北浦和公園で、駅から五分とかからない絶好の地であったが、校舎の方は昭和二十年に米軍に爆弾を落とされ炎上。急遽再建したので、お粗末そのもの、木造二階モルタル造り。床は板張り。下駄で校舎内を歩くのは禁止されていた。散在する建物間は、俗に井上ペイジメントと呼ばれるコンクリート板が並べられてあった。他の空間は芝生。昼休み、学生は皆ここに腰をおろして弁当を食べていた。学部生は文学科理学科合わせて一学年百六十人。それが十四の専攻に分かれていた。教員数はそう多くなかったが、職員は潤沢に見えた。五人の守衛さんも正規の職で、交替で二十四時間勤務していた。施設設備の不足を補うかのように、教職員と学生との人的交流は密で、旧制高の雰囲気依然在っていた。何よりも特徴的だったのは、語学の厳しさにあった。第二外国語（必修）の初級は週三回授業があるのに四単位であった。半年の講義は無く、評価は軒並み筆記試験。答えは成績伝票なるものを添えて提出。その伝票に担任の先生の名を記す欄があり、監督しているその先生に名前を尋ねる学生がいたり、或いは誤った名を記して点を下げられた学生もいたりした。経済学を除く文学科の専攻決定は三年次から。私は国語国文学を専攻したが、漢文学も捨て難く、両研究室に出入し、先生方も広く勉強することはいいことだと歓迎してくれた。貧乏な大学だったのに、卒業パーティーは大学の費用持ちであった。その夜、漢文学と物理学の先生が個人的に卒業を祝う宴を開いてくださった。旧制浦和高から教鞭をとってきた教授であった。文理学部は旧制高から後の拡大して行く大学へのいわば橋渡しの存在だったと今にして思う。学部改組によって当初四学部（後に五学部）と教養部が生まれ、先生方は学部と教養部に分散した。悲しい話も聞いた。学生数は増え、カリキュラムは変わり、それまで基礎学問が中心だったのが、応用的学問も設けられた。その後、学園紛争の時代が訪れ、それが終息した昭和四十九年春に、私は母校に戻り、教養部で教えることになった。学生の気質も変わり、紛争の影響もあってか、教職員との間柄も従来のように復さなかったのは悔やまれる。学生にパンキョウと呼ばれた教養部の授業は、とにかく日陰の存在であったが、大学を縁の下で支える地味な立場はむしろ私には面白く、それは文理学部時代に培われた心だったのかもしれない。その教養部も三十年の寿命で解体。教官配置換えで、平成七年四月、古巣とも言える教養学部に通り返った。大学が時代とともに斯く変化するのはそれなりに肯定できる。だが一方で、一見古び

て使えなくなったような学問が、その後思いもかけぬヒントを生んだという話もよく聞く。教養学部とは一体何が得られる学部かと時折問題視されるが、私は当面役立ちそうもないことを真剣に学ぶことこそ、効能は遅いが、未知の将来に備える最良の道のようにも思っている。功利性を追い求めず、ある意味無駄なことを自信と誇りをもって学び続ける学部を大学全体が認め合って、どの学問を修めた者も歩み寄れる充実した組織に作り上げて行ってほしい。今の私の願いである。

教養学部創世記のころ

教養学部第1回（昭和44年）卒 関根増男

東京五輪翌年の昭和40年度に文理学部の改組で生まれた教養学部の入学試験は4月にずれ込んだ。まさに『3期校』で倍率は約15倍だった。入学当時の校舎は、木造2階の古ぼけた校舎で「これが大学か」とがっかりした。しかし、東京に近い有利さもあって専門家がない科目には、東大などから著名な講師が来てくれるので、それが誇らしかった。

地理が好きな私は、入学後すぐに林野宏先輩（1965年卒）ら文理学部人文科地理専攻生を中心に発足したばかりサークル地理学研究会に入部した。1年生は全学部から20名近く集まったが、研究よりも旅行やサークルを楽しむような雰囲気であった。でも巡検や地域調査（高山、安房、甲府盆地、桐生）も行い、登山も旅行も暇さえあれば出かけていた。

2年生になり専攻を選択するときになると、地理学も専攻できる総合文化課程に入った。しかし、課程の中心は文化人類学という学問だった。私にとって初耳だった。「文化人類学って何だ?」「日本における文化人類学の提唱者である石田先生が来るらしいぜ。新しい学問らしいよ」。石田先生が集中講義（文3教室）に来た時は、一般社会人も大勢講義を聴きに來ていた。さすが日本一の文化人類学者だと思った。学生のどんな質問でも真剣に受け止めて答える態度が印象的で、先生の言うことが学問の最先端であり、これから日本にこの学問を広めさせたいという気持ちが伝わってきた。

1966年、その一番弟子ともいえる川田順造助教授が石田先生の思いを实践させる任についた。川田先生の授業は当時の文化人類学の最先端をいくものであった。国立大学で文化人類学の専門コースがあるのは東大と埼玉大学の2校だけなので、この学問を世間に広めていかなくとはというパイオニア精神が自然に育まれた。また先輩もいないので我々が良き伝統を先生とともに創っていかなくてはと思わざるを得なかった。予算が初めて付くので、研究室には本をはじめ何もなく、学問自体が日本では新しいので日本語の参考図書は限られていた。このようにないない尽くしの環境は、今思えばむしろ学問の心を感じることができラッキーだった。人数が少ない授業なのでさばれなかった。新しい学部・専攻なので4年になって必修科目が開設されるものもあった。1967年秋、ペルーの調査から帰ったばかり友枝助手が着任した。石田先生は東北大学から本学に着任したが、着任して1年ばかりで多摩美術大学の学長に推挙されてしまった。残念なことにその年急死してしまった。

研究室はとてもオープンで毎週金曜日に著名な講師陣を埼玉に呼んで、『文化鍋』を作り、

酒を酌み交わしながら語り合った。1 期生だけで伊豆に勉強合宿にも行って各自割り当てられた原典を紹介し合った。東大の文化人類学教室とも交流が行われ、若い学者や大学院生が交替で講義をしてくれた。東大との野球の対抗試合も行われ、相手を 0 点に抑え圧倒的な差をつけた。現地調査も単位に関係しないが先生がフィールドワークの実践力をつけさせようと秩父の両神村に設定してくれた。この山奥の体験はとても忘れられないものとなった。このような研究室から全国の多くの大学に埼玉大学出身の文化人類学者が生まれることとなった。

円周率 = 3

教養学部第 19 回（昭和 62 年）卒 折 原 茂 晴
教養学部国際関係論コース

先日、大学時代の先輩と国立新美術館にルノワール伝統と革新展を見に行った。その先輩とは学生時代は同じサークルに所属し、下宿部屋などでよくお酒を飲みながら夜遅くまで様々な議論をさせて頂いた仲だ。社会人になっても趣味を同じくする映画や美術展などたまに一緒に出かけて行く。

その日は鑑賞後、早めの夕食をとりながら色々話しが弾み、最後にはゆとり教育で育った若者の特徴について話し込んだ。それは、大学で教鞭をとっている先輩にとっても、また、職場で若手と接する機会が多い私にとっても、日頃から折に触れ考えさせられる課題だ。

ゆとり教育とそれ以前との違いで象徴的なものの一つに円周率の考え方がある。ゆとり教育世代は、円周率は 3、と教えられて育ったと聞く。我々の世代は、円周率は 3.14 (159 26535 …) と学び、果てしなく割り切れずなんだか不思議な数字とのイメージを持ったものだ。我々の常識や感覚からすると、円周率 = 3 で育った世代の行動や考え方には、若干の戸惑いを感じてしまうことがある。

先輩曰く、職場において、我々の頃は、上の人についていけないと置いて行かれてしまうと考える傾向の人が多かったが、ゆとり教育世代の若者は、置いていかれたらついて行かないと考える傾向の人が少なくないとのこと。実際、私は多少割り切れない思いがあっても頑張っについて行こうとしたクチだった。今の若者は、置いて行かれたら仕方ないからついて行かなくても良い、というか、あっさり割り切って、ただついて行かない、ということがあるようだ。また、その世代の特徴として、親から叱られたり否定されたりした経験が少ない分傷つきやすい人が増えているとか、議論されたことの結論や重要度の把握について十分な訓練機会が与えられなかった人も少なくないとかといった状況があるようだ。

久しぶりに会った先輩から、職場で若い世代を理解し一緒になって活動していく上で興味深い話を聞き、心躍る時間を過ごした。私は、改めて先輩の変わらない真摯な姿勢と熱心さを感じ、社会経験を経て一層培ってこられた人間性の一面を垣間見た思いだった。学生時代の巡り合わせに感謝の気持ちと、今も変わらぬ先輩・後輩の関係が、時間と人生経験を経て、円周率の如く、果てることなく深まり続くようにとの思いを抱いた。

埼玉大学創立六十周年を迎えて

教育学部同窓会 教友会会長 清水 章 夫
教育学部昭和 30 年卒

母校埼玉大学におかれては昨年度創立六十周年を迎えられ、五学部の総合大学として力強い発展を続けておられますことは誠に慶賀に堪えません。

教友会は、教育学部の前身である旧埼玉師範学校男子部・女子部、旧埼玉青年師範学校を母体として昭和 26 年発足いたしました。従って、明治 7 年(1874 年)埼玉県師範学校創立以来 130 余年の伝統を引き継いでおります。教育学部ではこの六十周年記念事業への参画として、私共会員一同が誇りとする埼玉県師範学校以来の歩みを振り返ることを企画する、学部長山口和孝先生発案による「教育学部歴史展示コーナー委員会」が設置されました。

同委員会は、学部棟耐震化改修に伴い各師範学校より引き継がれた貴重な資料や 60 年の歩みを語る数々の品々が発掘・整理されたことや、学生を顕彰する鳳翔賞制度が平成 19 年度から発足したことなどを契機に、教育学部の輝かしい歴史を語り継ぎ、学生・教職員の学部アイデンティティを図ることを願いとしたものです。

教友会は平成 16 年度より「学生会員」制を導入しました。以後、学生会員向け会報「学友」の発刊をはじめ、明治 11 年創建の埼玉県師範学校校舎「鳳翔閣」の伝統を継承した「鳳翔賞」の副賞として、埼玉大学名誉教授本田貴侶先生作成の『鳳翔賞レリーフ』の寄贈、単位取得の「寄附講座」『現代の教育課題と教職』の一昨年度より開講など、学生会員皆さんの篤学と、埼玉・わが国の教育を担う優秀な教員として巣立たれる支援に鋭意努めてまいりました。

この委員会の事業は、教友会が願っていた師範教育の実像と教育学部発展の歩みを具現するもので、母校の教育振興支援の趣旨に相応しいものです。そこで大学側の要請を受け、会を代表し会長、副会長 1 名、幹事長の三名が委員として参画し事業の推進に当たっております。

事業は二期に分け、第一期は、六十周年記念事業の一環として教育学部歴史展示コーナーの開設です。これは、埼玉県師範学校の校舎「鳳翔閣」が、埼玉サッカー発祥の象徴として浦和レッズのエンブレムとなっていることに因み、「埼玉県師範学校から浦和レッズまで」と題して、昨年 11 月下旬から十五日間、教育学部棟で盛大に開催されました。詳細は、「教友第 80 号」の特集で紹介しましたが、特に「鳳翔閣」の起源でもある修復なった太政大臣三條實美直筆の軸や、埼玉県二代県令白根多助書の扁額は圧巻でした。また、各師範時代の教育資料や教育学部六十年の歩みの一齣一齣を刻んだ数々の資料など、その価値を再認識させられました。

同事業の第二期は、この貴重な歴史教育資料の常設展示場の設営です。このことについて教友会は、同趣旨に賛同の意を表すための資金募集を行うことといたしました。そして去る 2 月、全会員に発起人一同名にてお願いいたし、多くの会員各位のご協賛をいただきました。現在、耐震化工事で新装なった教育学部 A 棟二階エデュスポ(学生会館)に、「鳳翔殿」(仮称)を平成 23 年度までに設営する企画が進められております。どうかご期待ください。

平成 21 年の「今年の漢字」は「新」でした。教友会も大学六十周年を契機に新たな躍進を期したいと存じますので、忌憚のないご意見とご鞭撻を賜りますようお願いいたします。

全国から注目される教育学部の方向性

教育学部長 山口 和 孝

国立大学法人化やむなしの方向に政治が動き始めた 1999 年、埼玉大学教育学部では、当時の加賀谷学部長の命により、「独立行政法人化問題検討特別委員会」を設置し、その後、6 年間かけて学部の将来計画を検討してきました。途中、群馬大学との統合話（2001 年 12 月～）、2004 年からの法人化、教職大学院設置法の制定など、まさに激動の事態がありましたが、津田学部長の的確な情勢判断、渋谷学部長の大胆な決断によって、「教員養成特化」（2006 年度）に踏み切りました。教職大学院は設置せず、「新課程」を埋め戻して学部での教員養成を充実する方向に舵を切ったわけです。この方向性は、全国から注目を集めただけでなく、教員養成学部としての性格を明確にして、受験生応募倍率も関東一位となり、教員採用状況も大幅に改善し、安定した教員養成教育にとりくめるようになりました。全教員が参加する長年にわたる慎重な将来構想議論を経て、大胆な学部改組にとりくんだところは全国でも稀です。

とはいえ、国立大学法人の教員養成系大学・学部をとりまく状況は大変厳しいものがあります。2010 年（平成 22 年）度からの第二期中期目標期間では、教員養成系大学・学部の組織・学生定員の見直しと附属学校の「利活用」が評価の重点項目となっています。これは、大学財政縮減政策の下で、教員養成系大学・学部と附属学校の存在意義（投下された国費に見合うだけの社会的意味がどれだけあるか）を示せない、“生き残れない”ことを意味しています。学校教員の中で、国立大出身者の占める割合は、小学校で約四〇％、中学校では二五％程度に低下しており、それであるならば、教員養成は私立大学に任せればよいではないかという財務省サイドの意向が反映しているのです。附属学校についても、国費をかけて維持する必要性が財政的に問われているといえましょう。いまや、教員養成や教育という課題は、国力の基盤を将来的にどう形成するかという広い視点や、人間形成という観点からではなく、対費用効果という経済・財政的なロジックの中で操作される政治の下におかれています。それは、「新課程」を残したり、教職大学院を設置したところ、あるいは、教員採用試験の合格率が良くない教員養成系大学・学部に、毎年のように、組織の見直し、カリキュラムの再編成、学部再編……などが要請される政治的環境を生み出し、大学は混迷を極めています。附属学校も、学校減・学級減を余儀なくされるところもでてきています。こうした、不安定で先行きの見えない教育・研究状況では、落ち着いた質の高い教員養成にとりくむことはなかなか大変です。

そして今また、大学財政がこれまで以上に大幅に削減されかねないという政治状況にあり、楽観は許されない環境が生まれつつあります。教員養成系大学・学部のスクラップをテコとする大規模な大学再編が迫られるかもしれません。しかし、埼玉大学教育学部と教育学研究科、そして附属学校は、政治状況に翻弄されることなく、関東地域における教員養成の核としての社会的機能を果たし、これまでの長く重厚な伝統をさらに蓄積できる方向を維持できるようにしたいと考えております。卒業生の方々のこれまで以上のご理解とご支援を願っております。

『シュウセン橋』渡りました

埼玉県師範学校昭和 15 年卒 沓 掛 義 男

平成 13 年度版「教友会誌」の「埼玉師範学校卒業生」の最初の記載は、「明治 8 年～昭和 26 年」とあります。西暦に直せば、1875 年～1951 年、86 年間の記録です。埼玉大学創立 60 周年以来の 60 年と比べると、4 半世紀も長い。つまり埼玉県の教員養成の営みは、制度・組織は時により変遷があったにせよ、1 世紀半近くも途切れる事なく続けられてきたのでした。その間、何千かの学生がこの学び舎を巣立ち、夫々の雄図を胸に、初等の子供達の育成に専念されました。私自身、その悠久ともいえる時の流れに乗った一枚の頼りない葉っぱであったような感慨を覚えます。私の伯父も明治 37 年師範科卒業でした。

私は、昭和 10 年 4 月に、当時の「埼玉県師範学校」と呼ばれた当校に入学し、昭和 15 年 3 月に卒業しました。そして、4 月から農村の「尋常高等小学校」に赴任し、「高等科 1 年男児級」を担当しました。ところが、当校在籍 7 年の間、最初の 1 年弱（旧制度の最後）と最後の 1 年弱（国民学校の最後）の 2 年足らずしか教壇に立ちませんでした。中の 5 年は「軍人」として戦争への直接参加でした。師範卒業生に適用されていた「短期現役制度」の廃止（昭 14）以降、一般人として扱われた最初が私たちであったわけです。入営は 16 年 1 月、復員は 20 年 12 月でしたから、形で言えば、戦中、戦後（敗戦後）の 5 年に跨っております。この事情は、おそらく、1 年前までの先輩諸兄には、ほぼなかったことであろうかと思います。

生涯の教職歴のうちで、日本の「敗戦と再起」は衝撃的でした。当時教職にあられた方々は、その後 26 年の講和条約まで、占領軍主導による「研修」を義務づけられました。復員後、25 歳の私が、今 90 歳の老齢、往時茫洋の感がありますが、以下稀有の証言のつもりで、ほんの幾つかをあげてみましょう。

＊戦前のこと

- ① 戦前、在学時代のこと、附属小学校における「教育実習」のことだけには触れておきましょう。実習期間は、学期別で、私達（理科組）の場合はほぼ 2 学期全期が充てられたように記憶しております。学期終末期に授業を受けたような気もしますが、その学期の成績は実習評価だけでした。つまり、実習中、そのクラスへの授業は休講となったわけです。当然、実習授業数は今の諸君の場合とは異なり、はるかに多かったのです。
- ② 当時の師範学校は中学校並みでしたから、学年単位の「修学旅行」があり、それが第 2 学期に行われましたので、実習中の者も参加しました。5 年生は、一般には「関西旅行」でしたが、特記すべきは、希望者（40 名）による「満州・朝鮮旅行」が初めて組まれたことで、私はそちらに加わって 19 泊 20 日の旅をしました。（因みに旅行費は 200 円。これは当時の寄宿舎費 20 ヶ月分に相当しました。）この試みは以後毎年実施の予定だったようですが、軍事輸送輻輳で 1 年で沙汰やみでした。長い歴史の中で、儲けたのは私たちだけだったでしょうね。
- ③ 国民学校の発足

国民学校令による学制は、昭和 17 年から 21 年まで。この期間は私達大多数が軍への服務と重なっており、実践に関わった者は尠なかったのではないのでしょうか。

＊戦後のこと

- ④ 当然のことですが、雄図虚しく戦塵に散っていった友を、教友会史の中に留めたいと切望してやみません。
- ⑤ 占領軍の指令により、教育現場への「プロ軍人」の復帰を阻止するため為、「復員教員の資格審査」が行われ、合格通知があるまで、私は給料日以外の出勤を禁止されました。私の場合、21 年の 1 月から 8 月まで給料をもらっての自宅待機、いわば長期有給休暇で、勿論こんな有難いことは二度とありませんでした。その間、晴耕雨読、時に米袋を提げての小旅行。8 か月もですよ。敗戦の「納得」には充分すぎる期間でした。
- ⑥ 21 年「米国教育使節団」来日。占領軍による義務的「研修」。覚えてたの Work shop です。講師（米軍某大佐）曰く「初等教育の教師は IQ=105~110（中の上）程度がよい、それ以上だと下位の子供に共感し得ない云々」・・・聴講者のかすかなどよめき（ああ、道理で俺の指導はうまくいかなかったんだね）と、まあ、こんな光景。自由研究、知能検査、group studies 等々、新鮮でした。
- ⑦ 占領軍に指導されるまでもなく、『何でも自由』を声高に叫ぶ「下剋上」的風潮、担任教師は子供に、ヴェテラン教師は若年教師に気負される雰囲気。かくて、教室でメンコ、廊下で鞠つき。皮肉にも、国民学校送別の年に噴出した「民主主義」です。みんな生き生きと脱線しました。
- ⑧ 戦闘帽をかぶった田舎の子供達は明るく元気でした。死を避け得た教師も昂揚しており、わずか 2・3 学期でしたが、疑似民主主義教育の華が咲きました。

さて、はるか昔、戦いありしかも霧煙の彼方、自身の無鉄砲な実践を回想する時、ああ、あれはひと時「教育無頼の時代」だったのだと懐かしみます。今は全く老耄の感慨、一茶に仮託して、「つぶ濡れの名を見る炬燵かな」、換骨奪胎して＝雨にも、風にも負けず精進する埼大在学生・卒業生皆さんへの尊敬と羨望であります。

たった一度の箱根駅伝

教育学部昭和 37 年卒 西 村 暢 二

2009 年（平成 21 年）11 月 1 日（日）、埼玉大学創立 60 周年記念講演会が開催された。テーマは「60 周年だから聞ける、埼玉大学・スポーツ・感動物語」であったが、陸上競技部門では「たった一度の箱根駅伝」について発表した。また、「歴史で綴る企画展」には、その時使用したタスキやゼッケンを展示した。

埼玉大学が出場したのは、1959 年（昭和 34 年）の第 35 回大会である。16 チームの参加であったが総合順位 14 位、（往路 14 位、復路 15 位）であった。1 区 4 年の松村選手が 2 位の快挙で、4 区 3 年の阿南選手も区間 9 位と力走した。他の 8 人は、区間順位 14 位か 15 位で 16 位はいなかった。私は 10 区アンカーの 22.3 キロ、鶴見から読売新聞社前であったが、区間 15 位、抜かれず総合 14 位でゴールし安堵した想いが今も残っている。

予選会は、前年の 11 月、都内練馬で実施された。現在は 20 キロで行われているが当時は 10 哩（約 16 キロ）で、上位 10 名の平均タイムの良い学校 5 校が出場権を得られた。予選会の結果、埼大は 5 位神奈川大学と僅少差であったが 6 位の発表であった。1 年生の私より、先輩各位は皆落胆していた。帰校してマネージャーが計算しなおしてみると、神奈川大学にミスがあり、埼大と入れ変わったが一度発表しているので、主催者である関東学生陸上競技連盟は両校の出場を認め 16 校で本番は実施された。予選会に参加した埼大の学年別人数は、4 年 1 名、3 年 5 名、2 年 4 名、1 年 3 名であった。翌年度は新 1 年生も入部し、数の上では増えたが、予選会当日が県の教員採用試験と重なってしまい、主力の 4 年生が参加できず、人数不足になってしまった。以後現在も埼大は予選会に参加しているが、出場権を獲得するのは国立大学では、「夢のまた夢」である。

今年で 86 回の歴史と伝統を誇る箱根駅伝であるが、国立大学で出場したことのあるのは、埼玉大学、筑波大、東京学芸大、横浜国立大、東京大、防衛大の 6 校で、埼大と東大が 1 回のみ出場である。最も多い大学は中央大学の 84 回で、優勝回数も中大の 14 回が最高である。国立大学の優勝は、第 1 回大会 1920 年（大正 9 年）の東京高師（現筑波大）の 1 回のみである。

平成 21 年正月、埼玉大学長上井喜彦先生が新年のご挨拶で「皆さん箱根駅伝、テレビで見ましたか」と話されると、多くの埼玉大学関係者から、「埼大も出たことがあるんですね」と強い共感があったというお話を伺った。このテレビとは、正月 3 日埼玉大学が「箱根駅伝今昔物語」で放映されたことである。①国立大学でたった一度の出場、②丁度 50 年前、③タスキやゼッケンが西村の手元にある等が採用された主たる理由である。デレクターの話では、放映時の視聴率は、紅白前半並みとのことで反響は大きかった。また、タスキは確認できた物としては、埼大が 35 回大会で使用した物が、最も古い物のようである。

半世紀以前に、たった一度走った箱根駅伝であるが、私にとっては、現在も人生最大の宝物として、強く心に残っている。

経済学部と経和会の今昔

経済学部同窓会経和会会長 田 坂 敏 幸

埼玉大学経済学部は、昭和 24 年に旧制浦和高等学校の流れ受け、文理学部として産声を上げたが、爾来、60 年が経過し、三学科および経済科学研究科として大学院をもつ首都圏を代表する国立大学法人の学部であり卒業生は一万人を超えている。また学生は北海道から沖縄までの全国からの出身者が在籍する学部になっている。

同窓会「経和会」は昭和 58 年に仲佐秀雄先輩や伊藤正昭先輩などのご努力で誕生した。学内の生協ホールで総会が開かれたことを記憶している。その後紆余曲折があったが、平成 8 年に会員名簿が刊行され、また、会報が毎年 5 月末に発行され経和会の歴史を飾っている。今年もまもなく会員名簿第 4 号が 8 年ぶりに刊行される運びとなっており、この記念誌が発行される時は新しい名簿が手元に届いているであろう。その間の歴史を振り返ってみると、昭和 28 年に文理学部第一期生 24 名が卒業、文理学部が 13 年続く。昭和 41 年に経済学部と呼称を変更し、約 130 名が入学するが一方で法律専攻が無くなり、卒業生から弁護士が誕生していたが途絶えてしまったことは残念だ。しかし、現在、現役学生から公認会計士が毎年合格する学部で成長していることは、誠にうれしいことである（平成 22 年卒業生では 4 名）。平成 9 年には経済学の見地から環境問題を学ぶ社会環境設計学科が誕生し、三学科体制になった。今日の環境問題をいち早く学科として独立させたのは経済学部教授陣の先見の明であった。

新学科の立ち上げに先立ち平成 8 年には経済学部では新棟が竣工し、徐々にではあるが経済学部は充実した学部になっていった。経和会は平成 10 年には経済学部講義室にエアコンを寄贈している。

また、埼玉大学経済学部はさらに進化を遂げる。平成 10 年、大学院経済科学研究科が JR 東京駅の八重洲北口近くにオープン、社会人向けのサテライト教室「東京ステーションカレッジ」として各界からの注目のうちにスタート、5 月 8 日にお披露目のセレモニーが行われた。県境を越えた大学院に世間が驚いたのも無理はない。また、この年平成 10 年 4 月には埼玉大学始まって以来初の経済学部出身の兵藤鋁学長が誕生し翌年 10 年には創立 50 周年を迎えた。さらに今般、我々卒業生が大学に誇りを持ってこのたび 60 周年をお祝いできたことは誠にうれしい限りである。学長が経済学部出身の上井喜彦先生であることも経和会にとってはご同慶の至りである。その間、卒業生は学生の就職支援にも乗り出し、就職カウンセラーとして十数年の実績があり、現在では私を含め五名が就職相談を行なっている。この動きも首都圏の大学の恵まれたところであろう。学生には積極的に利用して欲しい。

一方、卒業生に目を転じると、起業家では昭和 38 年卒の池田典義氏は㈱アイネットを立ち上げ、東証一部上場企業にまで創りあげた。神奈川県経済界の重鎮であり、埼大生の採用も行なってくれている。次に女性では、平成 17 年に卒業した西本千尋さんは学生時代から街づくり支援を行い、卒業してすぐに㈱ジャパンエリアマネジメントを設立し社長として活躍している。父親と二代に亘っての経済学部出身者である。また、変わったところでは平成 6 年卒の三上尽氏は三遊亭ぬう生の名の噺家であり、師匠三遊亭圓丈の名跡を継ぎ将来が期待されている。いろいろ経済学部を中心に書いてきたが、経済学部と共に、経和会も発展していきたいと願っており、今後の後輩にますます期待したいものである。

六〇周年の現在と未来

経済学部長 伊 藤 修

同窓生のみなさま。私は現在経済学部長をつとめる伊藤と申します。大学創立六〇周年を共に祝い、さらに今後の向上発展を図ってゆく趣旨で、ここでは経済学部の近況と今後の戦略について率直に報告させていただくことにします。

旧制浦和高等学校の系譜を継ぎ、文理学部から経済学部として独立したのが1965(昭和40)年、それから45年がたちます。かつての「二期校の雄」の時代から共通一次・センター試験の時代となり、国立偏差値順位表が出回るもとで、また国立授業料高騰による私大との競争激化のなかで、正直に言って苦戦を強いられてきました。さらに2004年には国立大学が独立法人化されたため、独自の戦略をもって特徴を打ち出し、社会の評価を勝ちとっていくことが待ったなしで迫られました。それからの六年はまさに疾風怒涛、われわれはかつての牧歌的な時代には考えられなかった密度で改革につぐ改革を重ねてまいりました。その結果が現在の経済学部であります。少し説明いたします。

現在、経済学部は一学年330人、うち昼間コースが280人。50人が夜間主コースで、これはいまや国立の社会人コースで最大といえます。学科は経済、経営、社会環境設計の3つで、それぞれ経済学、経営学・会計学、法学・行政関連諸分野を包含しております。現在の入試は学部一本で行い、学科別では行いません。したがって1年次は所属学科はなく、経済学・経営学・法学の「基本科目」三科目と「プレゼミ」を必修で学びます。社会科学三分野の基本とゼミ形式での読む・書く・プレゼン能力を全員もれなく身につけ、2年進級時にこの三基本科目の成績によって希望学科に分かれるという仕組みです。派手さや即戦力は追わず、広くて深い基礎力を養うという実力派指向の伝統のスクールカラーをさらに徹底したものであります。この点について迷いは一切ありません。

大きく変わったのは大学院です。日本トップレベルの社会人大学院を築きあげました。修士課程1学年30人、博士課程9人。客員教授陣に超一流の実務家を多数お招きし、留学生若干のほかは現役の社会人が夜間と土曜の授業で学んで、一切妥協のない修士論文・博士論文を仕上げていく梁山泊であります。東京駅前サピアタワーにサテライト(分校)も構え、すでに著名となった卒業生もどんどん輩出しています。ここは埼玉大学および経済学部の突出した切り込み隊としてさらに育てていくつもりです。ところがまだ埼大卒業生が少ない現状ですので、母校の大学院にどしどし入学され、研鑽を積まれますよう声を大にして宣伝させていただきます。

そのほか変わったといえば国際化と地元貢献の劇的な進展でありましょう。アジア・欧米にわたる海外協定校との盛んな交流・共同事業、100人に及ぼうとする留学生、という時代になりました。地元埼玉の諸機関との協力、貢献活動も大幅に拡大しました。埼玉新聞に経済学部が定期コラム欄をもっていることをご存知でしょうか。

前例や惰性に安住している余裕はありません。大学の王道を堅持しながら、やれることは何でもやる決意です。同窓生のみなさまのご注目とご支援を賜りたいと同時に、卒業後も大学をどうぞご利用下さいますようお願い申し上げます。

埼大生として学んだこと

経済学部昭和 56 年卒 館 逸 志

1981 年 3 月に埼玉大学経済学部経済学科を卒業し、現在の内閣府の前身経済企画庁に奉職して、30 年目に突入した。早いものである。経済企画庁では第 2 次オイルショック後のインフレ対応で、まず物価局に勤務した。その後は、環境庁で地球環境問題を初めて取り上げた環境白書の執筆、ロンドン大学留学、タイの日本大使館でインドシナ和平後の開発協力立ち上げ、企画庁に戻って中央省庁再編に向けた行政改革会議対応、アジア通貨危機後のタイの復興を支援するためタイ政府のアドバイザーとして再度の赴任、総合研究開発機構での日中韓の貿易投資の促進に関する共同研究立ち上げ、世論調査、地域活性化のための構造改革委特区・地域再生本部事務局、景気統計、そして現在の経済財政運営と実に様々な仕事をさせてもらってきた。

こうした仕事に取り組む上で、埼玉大学での学生生活は、私の血肉となり、基本的な発想の根幹を形成してくれたと感謝している。高校まで英語拒否児童で、漢籍、古典を好んでいたが、大学入学とともに、英語、ドイツ語、ロシア語と西欧言語を学ぶきっかけを掴むことができた。ドイツ語、ロシア語は皆初歩から学ぶので、英語に比べてハンディキャップが無く、大変楽しく学ぶことができた。私が語学に対して持っていた苦手意識はこのお陰で取り払われた。ドイツ語会話を親身に教えてくれた Frau Orito、ボルシチ、ピロシキを自宅でご馳走してくれたロシア語会話の美人先生、2 年間続けて秩父山寮での合宿をやってくれたロシア語佐々木先生など素晴らしく熱心な先生に恵まれた。

一年生から少人数の教養演習があり、経済学、政治学、哲学などの古典を少人数で読んだことは、青年期の人間教育として大変良かったと思う。経済学部では、アダムスミスからマルクスまでの古典を徹底的に読んだことで、政治経済学に関する基本的な思考方法が身についたと思う。今でも、資本主義に対する歴史認識、それぞれの国が抱える市場経済の社会基盤としての倫理など、経済政策に関して考える際の視座を与えてくれている。ゼミの村川先生は大変面倒見の良い先生で、ゼミのあとは毎回北浦和駅前の喫茶店で夜遅くまで人生勉強に付き合ってくださった。縦割りコンパで多くの先輩を紹介くださったことは、その後の同窓との繋がり の礎となっている。

4 年間自宅から自転車通学を続け、夏はプールで毎日泳いで、健康面でもそれまでの虚弱体質が大いに改善された。部活で精進した囲碁は一生の良い趣味となりそうだ。卒業旅行で 2 ヶ月弱西日本をバックパッカー旅行したことは世間の人情を知る良い切っ掛けとなった。道中、観光バスをヒッチハイクした経験などで渡る世間に鬼はなしと身に沁みた。

こうしてみると、埼玉大学は、こじんまりとして何事も少人数できめ細かな活動ができ、多感な青年期に全人格的な教育を受けるのに大変良い場であったと気づく。派手さは無く、素朴であるが、人生の一時期に勉学、読書、サークル活動に集中できたということはかけがえの無いことであったと思う。母校の一層の発展を心より祈念している。

地学教室の歩み

文理学部理学科地学専攻同窓会（エルデ会）
昭和 42 年卒

角 田 史 雄

科学・教育界の再建

1945 年の太平洋戦争の終結をうけて、日本の最先端技術であったサイクロトロン破壊命令とか航空に関する研究の禁止命令がだされる一方で、二十世紀研究所や理工学研究所の開所とか、資源委員会の発足など、新しい日本の科学技術を模索するうごきも現れた。また学校関係の組み替えが指示され、大学では、国立学校設置法が昭和 24(1949)年 5 月 31 日に施行された。

文理学部地学教室の発足

国立学校設置法によって発足した埼玉大学文理学部理学科でも、昭和 24(1949) 年から学生募集が行われた。しかし、後述するような事情もあり、開学してからの数年、地学教室では、定員に大幅に満たない学生しか入学していない。同年の 6 月 31 日付けで遠藤隆次氏が埼玉大学文理学部教授として赴任し、同年 10 月には、埼玉師範学校に教授として 1 年前に着任したばかりの森川六郎氏が助手、鉱床学の植村癸巳男氏が非常勤講師に招かれて教育スタッフがそろった。この陣容で、地質・鉱物・古生物・天文・気象・地震・海洋などの科目を教えなければいけなかった、と遠藤氏は述懐している。文理学部の校舎としては旧制浦和高等学校の特別教室 3 棟と、教育学部の数棟とがあてられたが、地学教室は、築 50 年以上経た教育学部の手工室の一隅だった。理学科地学教室として、研究・教育に使える図書・機械・器具その他の設備は、きわめて貧弱だった。昭和 26(1951)年には、変成岩をご専門とする関 陽太郎氏が助手に加わって研究・教育スタッフは充実したが、年間の教室予算は十数万円でいどだった。

教室の整備の工夫

予算のほとんどは機械・器具・備品などの購入にあてざるを得なかったから、研究の最先端を知るための専門雑誌の購入費用は無かった。そのため、諸外国の地学情報は、図書の交換というかたちで文献を揃えるしかなかった。ところが交換するための英文紀要が無い。そこで、埼玉大学文理学部紀要 B 系統という英文の紀要の発行を遠藤氏が教授会に提案した。この英文誌と交換で、諸外国の研究機関の文献をそろえたい、という要望が受け入れられて図書の充実がはかられた。

学生の育成とエルデ会の発足

当時の埼玉大学においては、文理学部地学教室が地学の教育センターもかねていたから、教育学部生の卒論指導も行った。意気と創意・工夫とで苦勞をかさね、テレビが茶の間に登場した昭和 28(1953)年に、第一回目の卒業生（文理学部生 1 名、教育学部生 6 名）が、地質産業界や教育界へ巣立っていった。そうした折りに、教室を去っていく先輩を見送った学生の間から、「社会に出てからも心の拠り所となり、情報交換もできる同窓会をつくろう」という声があがった。地学教育のセンターとしてふさわしい名前の同窓会、ということで、地質同好会などの多くの候補がだされた。しかし、「大地」を意味するドイツ語の響きは悪くない、という

ことで「エルデ会」に落ち着いた。そして同名の機関誌の第一号が、ガリ版ズリで印刷されたのは昭和 30(1955)年だった。会の発足にたずさわった中から、2 回生の堀口萬吉氏が昭和 36(1961)年に文理学部助手、3 回生の村井武文氏が昭和 37(1962)年に同教務職員に採用され、地学教室の担い手になった。

社会的な要請への研究の対応

第一回生が送り出された昭和 28(1953)年、日本地質学会は災害地質小委員会を設け、地質学の社会的な要請に対応する体制を整えはじめた。教室のスタッフもその年に、埼玉県農林部から依頼を受け、「埼玉県秩父・入間地方の地質」を著す事業に参画した。昭和 30(1955)年からの経済成長率 10%以上の高度成長期になると、昭和 31(1956)年に国の原子力委員会の創設、昭和 33(1958)年に新幹線開業などがあった。地学界には、外国への鉱産物資源探査、新幹線などの大型事業の地盤調査、災害の調査などが要請されるようになった。当時の教室のスタッフは、古生代の地質や化石、変成岩などを研究テーマとしていたが、そうした社会的な状況もあって、このころから専門を深化させつつ、昭和 36(1961)年の群馬県・二瀬ダムの調査への参加、地下水、地震、地球の最新期・第四紀という新しい地質時代などの研究も手がけはじめた。こうした研究面での努力もあって、昭和 39(1964)年には、日本地質学会第 71 年総会を埼玉大学へ招致できるまでになった。

実践的な教育

10 回生(昭和 37[1962]年)くらいまでの卒論のテーマは、古生代・中生代・新生代という 200 万年前より古い地質時代の地質や変成作用に関するものだったが、11 回生からそれ以後の第四紀に関するテーマのものもでてきた。このあたりから、教室の教育内容もより実践的なものが加えられた。つまり、昭和 37(1962)年あたりからは、進級論文でグループごとに学生自身による地質図づくりをさせることもあった。自分で地質図がつくれれば、地質関連会社にはいってすぐに、現場で即戦力として働ける。また、地質には欠かせない地質ボーリングも、やぐらを組み立てて、地面を掘削させるという実践的なものだった。また、日立鉱山での実習では、地下 800m の坑道へもぐり、灼熱の掘削現場を体験させたりした。あるクラスでは、そうした坑道で、実際に落盤事故にあったこともある。その一方では、非常勤講師の茂木清夫先生の講義で、最新の地震学を学ばせて、地学情報の最先端にふれさせてもいた。

卒業生の社会貢献

社会に巣立った卒業生の行き先は、教育界と地質産業界が多いが、地学関連分野の官公庁の研究分野へすすんだ者もめだつ。また、12 回生(昭和 39[1964]年)以降では、大学院を経て大学教員になったものもいる。そして、それぞれの場で、要職の重責をはたして、次世代の地学者を養成しながら、それぞれの社会貢献をはたしてきた。そうしたなかで、大学時代の少人数で、きめのこまかい、かつ、実践的な教育が役立ったことは言うまでもない。とくに、知識偏重ではなく、現場で役に立つ教育をうけた経験は、どんな場合でも、創意と工夫を織り交ぜてチームを引っ張っていく方法を身につけさせてもらった、と実感している者が多い。また、そうした中で、心の糧、情報交換の場であり続けたエルデ会の存在は大きかった。

エルデ会の終わり

文理学部地学教室は、東海道新幹線が開業した翌年の昭和 40(1965)年、文理改組によって

16 年の歴史を閉じ、エルデ会も終わった。エルデ会は、敗戦から立ち直り、高度成長期へつきすすんだ状況のもとで、地学界の発展の一翼を担った。そして、現在の地質産業への橋渡し役の一端をはたした。この小文は、そうしたエルデ会の沿革をなぞったに過ぎない。その語り尽くせない歴史の端々は、「窮亦楽 通亦楽—遠藤隆次の思い出の記—」（土田定次郎代表編集・遠藤 律発行、1970 年、252 頁）、「温故知新一堀口萬吉先生記念文集—」（堀口萬吉先生記念文集編集委員会、249 頁、1995 年）などを参考にさせていただいた。もし、誤りがあれば、その責任は著者にあるが、ご寛容いただきたい。

化学同窓会の歩み

文理学部理学科化学専攻第 2 回（昭和 29 年卒）
化学同窓会協議委員長

横 澤 靖 夫

1999 年 11 月 26 日 埼玉大学開学 50 周年記念式典が浦和のロイヤルパインズホテルで盛大に開催された。同日同じ場所で式典終了後「文理学部化学同窓会」の創立総会が催された。これは有機化学の海老根名誉教授の懇望により有志の協力で成立した。

このときは、今や埼玉大学に「文理学部」という存在がなく、卒業生は学校に行っても何処を訪ねてよいやら途方に暮れる状態でした。卒業時は校舎は北浦和駅前にあり、昭和 40 年に現在の下大久保の地に移ったキャンパスは私大のものかと思うばかりの素晴らしさで、理学部、工学部とあるが、わが故郷は何処と寂しい思いでした。

この文理学部化学同窓会の創立にあたり、当時学科長であられた永澤 明教授が、「学校に来たら理学部基礎化学科の事務室を訪ねてください。卒業生の先輩達の名簿はしっかり管理しています。将来万一のことがあってもアルバイトを雇ってでも守って行きます。」とおっしゃって下さったので、涙が出るほど嬉しかった思い出があります。

その後、2002 年 5 月 25 日 文理学部理学科化学専攻第 1 回卒業の星野名誉教授の提唱により「埼玉大学化学同窓会」が大学会館にて 200 名を超える参加者により設立総会を迎えた。それまで上述の「文理学部」は 17 回まで、その後は「理工学部」、さらに分離して「理学部」と「工学部」になり、同じ「化学」でも何処に属するのか不明の状態となった。今回、統一して「理学部基礎化学科」を本拠として、文理、理工、理、および大学院の卒業生を含めて「化学同窓会」とした。

当初、同窓会の活動として、星野教授の発案により在校生の就職活動を応援するために基礎化学科との共催で「化学の未来への展望」と題して OB を講師として講演会を開催し、会社の紹介や企業に入社してからの苦労話やらをして貰い、講演要旨は第 4 集も発刊されました。この功績は大なるものがありますが、この発案者星野正松氏は惜しくも平成 21 年 11 月急逝されました。ご冥福を祈ります。

同窓会の総会は隔年開催とし、昨年 2009 年 7 月第 4 回を迎えました。
今後の活動は学校と協力し、また同窓生との親睦を図る場となることを願って行きたい。

自分史的回想

文理学部理学科生物学専攻(昭和 32 年卒) 永 井 良 徳

原稿依頼を受けていささか戸惑った。1957 年(昭和 32 年)3 月埼玉大学文理学部理学科生物学専攻を卒業したのだが、大学の発展や組織改編に伴って、関連学科と云うことで現在の理学部分子生物学科同窓会に繋がったようである。と言うことで私は理学部分子生物学科同窓会の一会員になっている。埼玉大学創立 60 周年記念誌に寄稿するにあって、色々な回想が始まったのである。

私自身の経歴は複雑である。小学校(5 年生から国民学校に変わった)は横浜で、旧制中学の 2 年生の年末に静岡県のある学校に転校した。その後、新制にかわって昭和 25 年に新制高校卒業の筈だったが、一年遅れて新制高校普通科を卒業した。家庭の事情等あって、中学校助教諭免許状取得試験を受けて資格を取得した。地元の中学校校長が、入れ代わり立ち替わり勧誘にこられた。その数 10 校ほどで、一番近い中学校に赴任した。敗戦直後、混乱の中で、このような状況は至る所に見られた。

教壇に立って 3 年生とは 4 歳しか変わらないのであった。しかも、新制高校を卒業しただけでの新米先生であった。2 年間務めたのだが、校務分掌は正教員と差があるどころか、一端に担任させられて、理科の授業数も正教員と同じだったし、若くて元気がよいから体育の授業まで持たせられた。時々担任した子供達に呼ばれて、同窓会に出席するのだがそれでも「教師冥利に・・・」と言う有り難い現在がある。その子供達の中には社長、会長等社会的に重要なポストにあって活躍した人が大勢いる。それぞれ立派に成人されている。忘れられないことを二三上げると、戦前戦後、流行になった作文指導をやってみた。戦前、国分一太郎、戦後は無着成恭がいたが、特別な手本などなく、「伸びゆく心」と題して日記指導や書かれた物を材料に交流指導を行った。思い出に残る教育の姿だったと思う。また、クラブ活動で女子バレーボール顧問を担当、郡下の大会で準優勝を勝ち取らせた。我武者羅に若さで立ち向かったのである。お陰さまで、自分の進学勉強にいささか影響があったのではないかと後日考えさせられた。もう一つ、担当授業はさることながら、当時高校進学が盛んになり始めて、3 年生の三分の一の進学希望者に放課後補習授業を行った。希望者全員が第一希望の学校へ進学できた。周囲の状況と比較してみると、素晴らしい実績であった。勿論、教員達が素晴らしい組織・体制のもと成し遂げることが出来たのだが。

とんだ回想をしてしまったが、昭和 28 年に東京理科大学化学科入学、昭和 30 年 4 月埼玉大学文理学部理学科生物学専攻(3 年次)に編入学したのである。当時、理科系私学で授業料が一番安かったが、国立はもっと安くて助かった。東京 2 年、埼玉 2 年アルバイトはよくやった。殆ど自分で学費と生活費を稼いで生きてきた。

過日、北浦和駅西口から旧制浦高、つまり、埼玉大学文理学部正門のあった所から北浦和公園と称する旧制浦高生のモニュメントのある場所へ入っていった。そこにあった理科の建物、即ち物理、化学、生物、地学、そして、私が単位をいただいた白石早出雄先生の「数理哲学」

の授業を受けた建物や本館、図書館等々、当時の面影を残すもの何一つ無くなっていた。しばし呆然と立ちつくしていた。

3年次、4年次の二年間学んだ生物教室の建物は平屋建てで、中央に事務室があり東側が植物、西側に動物の教室があった。動物の講座は加藤光次郎教授（動物分類学の権威）のもと、学長になられた須甲鐵也助教授、そして、不慮の事故で亡くなられた西原助手がおられて、直接ご指導を頂いた。多くの東京教育大学の先生方の講義を受けた。珍しい先生に浮遊生物学の講義を受けた。それは東北大学名誉教授小久保清治先生だった。加藤先生には卒論のご指導を頂いたし、須甲先生には陸水学、エコロジー等を数えていただいた。学生の中にとけ込んでおられて、失礼な言い方で申し訳ないが、うち解けた兄貴的存在だった。

理科大へは幸いなことに九段の靖神社脇弥生門から入った所にあった（財）東京学生会館から通学することが出来た。旧近衛師団兵舎を改装して使用していた。パリのカルチエラタンとも云うべき学生の貧民窟のようなところで、都内官公私立大学学生が七百名ほど入館していた。この中から世に出て活躍された方も見かけたものである。

埼玉大学編入学と同時に蒼玄寮（常盤町10丁目）に入居した。年齢が一回生と同じだったので、初から大きな顔をしていた。二年間の生物学徒としての生活、寮生としての生活は貧を除けば楽しかった。濃密な青春の一齣と言うことが出来ると思う。

卒業後の進路は最終的に埼玉県立高校に就職した。35年間教員をした。高校生の進路指導に可成り長く携わったので社会、学校、生徒、家庭それぞれとの関わりの中で私自身も成長した。人の生き方についてとても難しくて、進路指導をやってきたなどとてもとても言えたものではない。それだけでなく、非常に幅広い体験をさせて貰ったので、感謝をしている。最後は管理職をやらせて貰ったし、定年退職後も健康維持と共に動き回ることが出来るのも有り難いことである。

現在の生活は、妻の介護と家事全般がその土台にあるが、定年退職時に立てた目標はどうかやうに遂行出来ている。その一つ、自分の生きてきた跡を纏めて記した「自分史」は二冊になった。書の道にも迷い込んでいる。平成20年、喜寿と金婚を記念して、書の個展を行い、前記「自分史」を出版した。

今の心境は言葉にすれば簡単である。

生きてさえいればと祈りつつ

頑張ってきた

ささやかな喜びと楽しさを

求めて生きている

文末にその個展展示作品の一つ、文章として練れていないが残しおきたいものを記しておく。

健康で 豊かな心を保ち

楽しい人生を送る

自己を知り 自分にあった

生き方をつくりだす

無理のない 実践を継続

努力し目的を成就させる

本物に出会い、人との関わりに支えられた学生時代

生体制御学科第5期（昭和60年卒） 関 口 い づ み

高校時代、生物を教えてくれた恩師から聞いた「生体制御学科」という聞きなれない名前に、ちょっとカッコいいな～という思いを抱きながら入学したのが、今から約30年近く前のことです。たった30人の同級生や先輩方はどの人も個性派ぞろいでしたが、「ついていけるのかな・・・」という不安を感じたのもつかの間、あっという間に意気投合して卒業後の今でも仲が良いのは、その頃のありとあらゆる無茶ぶりが良かったのか悪かったのか・・・。

先生方も、学生に負けず劣らず個性的でユニークな方々ばかりでした。休み時間にソフトボールに誘ってくれる先生やお酒の席にいつも付き合ってくれた先生もいて、私たちには見守られている心地よさがありました。

そんなアットホームな大学生活が始まって、さまざまな授業がスタートした直後、「やっぱりこの学科に入って良かった」と心から思ったのが数々の「実習」でした。形態形成学研究室の故竹内先生をはじめとする先生方に連れられて、秩父山寮周辺の山道を歩きながら植物の名前を覚えたことは今でも忘れられません。発生学研究室の石原先生をはじめとする先生方と三崎にある臨海実習研究所を訪れて、夜通しひたすらプランクトンのスケッチを書きまくり、細かい点を打ち続けました。故利根川先生が櫂を持つ船に乗って、夜の海にプランクトンの採集にも出かけました。たった3日間の実習でしたが、どれだけ多くの生命に出会ったことでしょうか。その間に私が受けた感動は、その後の私の教師生活でどれだけ生徒たちに語ったかわかりません。

その当時の4つの研究室の先生方が展開してくれる学生実習は、どれも「本物と出会うこと」ばかりでした。そこには、今まで教科書でしか見たことのない光景や知らない生命の営みが目の前で繰り広げられていたのです。私が発生学研究室に席を置くことになった大きなきっかけの一つは、学生実習の時間に実体顕微鏡で観察したカエルやウニの発生の過程・・・何時間見ても飽きなくて、夜通しで次の日までずっと観察していたことを覚えています。当時は、ウニ部屋の中にアフリカツメガエルが何十匹も泳ぐ大きな水槽があり、そのカエルたちの世話をすることも私の大切な仕事になりました。「科学の入り口は、まず本物と出会うことからだ」と口癖のように言っていた高校時代の恩師の影響で、私は生物を学びたいと思い、大学卒業後も生物の教員を目指したのは、やはりそのことのすばらしさを次の世代に伝えたいと思ったからです。

本来の学業以外の時間も、私たちは多くの人たちとよく関わり、かなり濃い時間を過ごしました。入学直後には、生協が主催する「生協祭り」にクラスで参加したり、11月の「むつめ祭」に「生体酒場」を出店し、夜通しで先輩後輩とともに話しこんだものです。むつめ祭実行委員会に生体制御学科の学生が多く関わっていたこともあり、企画や準備にもずいぶん力を注ぎました。たくさんの困難にぶつかり悩んだことも今は良い思い出ですが、地域の方々にもずいぶんお世話になりました。卒業して四半世紀、今振り返り思うことは、その当時に多くの人

と関わり教えられたことが、現在の私の根底に根付き基礎を作っているということです。年齢や立場の違う人たちと交わることの楽しさを忘れられず、教師を辞めた今も人と関わり続ける市民活動を展開しています。教師を辞めて、私が味わった感動を生徒に伝えることはできなくなりましたが、その代わり、自然と小さな子どもが豊かに関わるために起こしたその市民活動の中で、私は今でも子どもたちに語り続けています。

学生の皆さん、これからどんな道に進まれるとしても、まずは「本物」に出会うすばらしさをぜひ大切にしてください。どんな生命の営みも、そのものに出会いその中に身を置いて体中で味わってみなければ解らないことがたくさんあるでしょうし、それはこれからの人生をずっと支えてくれるでしょう。そして、その感動を分かち合えるたくさんの仲間と出会ってくださいね。

私と遊んでくださった学生さん達

数学科同総会 奥村正文

私は1969年1月1日付で助教授として埼玉大学に着任いたしました。それから2002年3月の定年退職まで33年間大変お世話になりました。着任は年度始めの4月1日付が普通ですが、当時数学の先生が少なかったので3月の入学試験の採点をさせたいという教室の意向があったようです。この年は大学紛争が真っ盛りの年で東京大学はついに学生募集をあきらめ受験生は東大を受験できなかった年でもありました。この大学紛争は埼玉大学にも広がっており全共闘系の学生さんと民青系の学生さんが鋭く対立していました。この紛争の為か当時の学生さんは現在と比べて4年間で大学を卒業する人（卒業出来る人？）の数が少なかったようです。最初の1969年度、私は前年度に講義をしなかった事もありゼミは担当しませんでした。私は全共闘系のシンパとみなされたようでゼミは担当していなくとも私の研究室にはそれらの学生さんが常駐し、さながら梁山泊のようでした。修得した単位数も人によりいろいろでしたので1970年度から3年間にわたりこれらの学生さんが私のゼミに来ました。1967年から1969年に入学された人達ですが殆どの人は6年以上は在学することなく卒業されました。

当時数学教室は今の理学部1号館の5階の約半分しか占有面積がなく、ゼミは各先生の研究室で行なわれました。私の研究室では週1回のゼミのほかこれらの学生さんの控室又は遊び場であり、私も一緒になって将棋やトランプ遊びをしたものでした。研究室に麻雀牌を持ち込んだ人もいましたが、これは音がうるさく他に迷惑なので麻雀をやりたいときは北浦和駅前の雀荘に行ったものでした。それでもゼミそのものはいたって真面目にやっていたように記憶しています。最初の1970年度のゼミは4年生はただ一人でしたが、この人が現在日本を代表する大学の教授になり21世紀COE採択拠点リーダーとして活躍されていることは私の誇りとするところであります。次の年度のゼミはまさに全共闘とそのシンパの学生さんの集まりで、その中の一人は今でもその時の志を持ち、1年間に裁判の傍聴、集会にそれぞれ100回以上も行

っておられます。また大変な論客もあり私とは何度も相当激しい言い合いをしました。その人は後に東京都の中学校の校長になりましたが、卒業式で先生方に君が代を唄うことを強要していたかと思うと（実際に強要したかどうかは不明）人生の皮肉を感じます。私が還暦の時にはこの人たちが中心になって盛大なお祝いをしていただき大変感謝いたしております。この人たちは今は還暦を過ぎられ第2の人生を楽しまれているようです。

私にはもう一クラス強く印象に残っている学年が有ります。前の世代から10年、1977年入学の人達です。その頃文部省（今の文科省）は学生対策として厚生補導予算を大学に配分しました。数学教室ではこの予算を新入生の1泊研修旅行に使っていました。1年生の線形代数と微積分の授業担当者2名をその学年の担任と決めて学生さん達が各先生のゼミに就くまでの形式上の責任者というものです。私がこの年度の担任の一人だったせいか何人かの人たちが私のところに入出入りするようになりました。このグループの人達は皆「団体行動は大嫌いだ」と言っていながら彼らだけになると凄く強い団結力を示しました。10年前の人たちとは私は将棋、トランプ、麻雀で遊びましたがこの学年の人とはよく旅行をしました。学生さんの運転する車2、3台に分乗して秩父、伊豆、箱根、草津などに一泊程度の旅行でした。若い学生さんの運転ですので多少の無茶もあり、肝を冷やすようなことも2度ほど経験しましたが、事故には至らず楽しい思い出だけが残って良かったと思っています。この人達は今50歳を越えられ、それぞれに社会的地位を得られ活躍されていることは喜ばしい限りです。私の定年退職の記念の会はこの人たちが中心になっておこなっていただきました。遠く岩手県から来てくださった方もいまして大変感激いたしました。

このようにある年齢に至までの私は学生さんにはよく遊んでいただきました。また卒業された後にもいろいろな機会に何かとお誘いをうけており本当に有り難いことと思っています。私はあと1年で後期高齢者になりますが、まだ口も耳も達者ですので今後もお誘いがあれば喜んで皆さんと盃を交したいと思っています。

黎明期の研究室点描

工学部同窓会副会長 羽 石 操

工学部同窓会は、大西利樹会長の努力により順調に発展しつつある。一方、本学工学部は、創立からほぼ半世紀を迎えようとしている。そこで本稿では、黎明期の工学部における一研究室の動向等について述べ、関係諸氏の意見を承りたいと考えている。なお、著者は第一期生として工学部を卒業したが、当時本学には大学院が設立されていなかったため他大学の大学院に入学しそこを修了後、直ちに電気工学科高周波工学研究室に着任し、以来、40 年間に亘り高周波工学研究室の教育・研究に従事してきた。そこで、着任間もない頃、すなわち、学生たちが極めて元気であった頃の研究室の動向とその頃の学生（第 5 期生）の社会における活躍状況等について記述してみる。すなわち、当時電気系学科の学生定員は 40 名程度の小所帯であったが、我国は高度成長の影響下にあり、理工系の人気は極めて高く、当学科にも多くの優秀な学生が入学してきた。一方、当時の研究室における研究設備・研究用文献等の整備状況は一般に脆弱であったが、各研究室の教授・助教授及び助手が一体となり 10 名前後の学部卒研生への教育・研究に鋭意取り組んでいた。かかる状況下にあって、当該研究室の学生たちは、当時虎の子であったマイクロ波発信機を夜中まで時分割で利活用し卒業研究の作成作業に従事すると共に、ある学生は必要文献入手のため国会図書館に自主的に出向き、必要な当該文献を自筆筆記し持参するといった努力を惜しまず、更に、ある学生達は、高周波工学の分野における難解であるが極めて重要な文献である、ストラットンの「電磁理論」の原書を自主的に輪講する等の努力を重ねていた。このように、学生生活を楽しみつつ、かつ、卒業論文の作成に鋭意努力していた高周波工学研 5 期生は卒業後も大いに社会で活躍するに至っている。すなわち、ある卒業生は、日本を代表する総合電機メーカーの一つである M 社の専務取締役（現役）として、またある卒業生は東京工業大学の教授（現役）として、更に、他の卒業生は大手の無線関連電子機器会社の研究所長（退役）として活躍するに至っており、その他の卒業生もそれぞれの分野で活躍している次第である。当時は、携帯電話、ワープロ、授業評価、パソコン及び便利なパソコン用ソフト等は皆無であり、卒業論文は勿論手書きであった。更に、学部の一般教育では、人文系、社会科学系及び自然科学系を各々 12 単位、合計 36 単位の単位取得及び第 2 外国語を含む語学と体育の受講が要求されていた。現在の学部のカリキュラムと比較するとかなり相違した内容であった。また、前述のごとく大学院は修士課程も設置されてはおらず、博士課程まで設置された現在の状況とは大いに異なっていた。

しかしながら、設備等の整備状況が脆弱であった頃の卒業生諸君の社会的活躍状況を知る毎に、教師として大いに感動している今日この頃である。

還暦、そして大還暦

工学部長 佐藤 勇 一

埼玉大学は、昨年度開学 60 周年を迎えました。60 年経ちますと干支による暦が一周して還暦となり、初心に戻って新たな飛躍を目指して次の還暦、つまり大還暦に向かって進んで行くことになります。

工学部は 1963 年、大久保キャンパスに設置された機械工学科と電気工学科の 2 学科から始まりました。学生定員は 80 名でした。当時の大久保キャンパスは、風が吹くと砂塵が舞い上がり、雨が降ると泥濘るみ歩行に大変な困難をきたす所だったと伺っております。

それから 50 年近く経ち、社会の要請にこたえるべく学科の増設、改組を行い、現在では、機械工学科、電気電子システム工学科、情報システム工学科、応用化学科、機能材料工学科、建設工学科、および環境共生学科の 7 学科構成となり、学生定員も 440 名と当初の 5 倍以上の学部へ成長いたしました。全ての学部が大久保に集まり、春先には桜とともに新緑の美しいキャンパスとなっております。

現在、工学部の卒業生の半数以上が進学する大学院は 1972 年から修士課程が順次設置され、1989 年には理学部と工学部を併せ博士（後期）課程が設置されました。さらに、2006 年には全面的な改組を行い、新しい理工学研究科として歩みを始めており、工学部に学ぶ多くの学生に更なる教育・研究の場を提供してきております。

近年、就学人口が減少し、さらに残念なことに工学部を希望する学生の減少が懸念されております。今までのような量的な拡大から質的な改革への転換を求められております。先の見え難い現在の変化に対応すべく、工学部も様々な可能性を探りながらゆっくりと着実に変革を進めてきております。今後は、キャンパス内の全学部と協力し合ってよりよい埼玉大学を構築することが重要と考えております。

埼玉大学同窓会会員の皆様には、今後とも、ときに厳しく、ときに暖かくご指導ご鞭撻を賜りたくお願い申し上げます。

最後になりましたが、皆様のご健勝、ご活躍をお祈り申し上げます。

北浦和公園の思い出

理工学部昭和 46 年卒 前 川 仁

北浦和公園は、北浦和駅前に立地し、埼玉県立近代美術館や彫刻・噴水庭園を有する緑豊かな憩いの場です。この地に埼玉大学があったことは存外知られていないようです。

私が大学に入学した昭和 42 年、埼玉大学には、その北浦和キャンパス（文理キャンパス）の他、現在のさいたま市浦和区役所―旧浦和市役所―に経済学部キャンパスがあり、また下大久保キャンパスへの統合を目指して建設が進んでいました。下大久保地区には、教育学部、理学部と、工学部の電気・機械棟がありました。最初の二年程は、教養課程は北浦和キャンパス、専門の講義は下大久保という区分だったと思います。北浦和―大久保地区間の交通は、埼大通りは未だ影も形も無く、大久保団地へのバス路線のみでした。

この文理キャンパスを広いと思ったことは当時一度もありませんでしたが、広い運動場（グラウンド）、雨天体操場、図書館、生協などが一通り揃っていました。グラウンド北端には「サークル部屋」と称するオンボロ長屋があり、コンクリート塀を乗り越えるとすぐに北浦和西口銀座商店街に出ることができました。つまり、北浦和公園の庭園と「埼大通り」が、当時のグラウンドということになります。埼玉大学は駅前の一等地に主キャンパスを持っていた訳です。

さて、当時は大学紛争が全国の大学を席卷しており、埼玉大学も例外ではありませんでした。ボンヤリ者の私は、ある日正門が机や椅子で「バリケード封鎖」されているのに、ただ当惑したことを覚えています。同じ学科の仲間には、志の高い者が何人か居て、授業ができないのなら自分たちでやろうということになり、自主講義のテキストを決めたり、準備段階があったことは覚えています。また、旧制高校から引き継いだ態の大教室が、「団交」の会場となり、和達清夫学長を学生達（+α?）が取り囲んで何事かを「糾弾」し、大柄な学長がそうした状況にも誠実に対応している様子を遠目に見たことがあります。しかし、そのような嵐も一時的なもので、分相応に教養課程の授業風景も記憶にあります。線形代数や物理学など、意義も内容も理解できていませんでした（ここだけの話ですが）。ただ、当時の辞書には「先生の教え方が悪い」という語彙はありませんでした。

課外活動は当時も盛んで、私は入学式後のオリエンテーション行事の演武に感銘を受けた合気道部に入部しました。しかし、その稽古場確保は、最初の頃はなかなか大変で、県警の柔剣道部が常用する浦和武徳殿や、上述の両キャンパスの雨天体操場などを転々としていました。春休みの学内合宿では、稽古・宿泊と食事のためには両キャンパス（つまり、北浦和と浦和区役所間）を往復する必要がありました。昨今の学内外の社会インフラの充実振りとは比ぶべくもありません。

たまに北浦和公園に立ち寄ると、『グラウンドと教室を隔てる並木はこの辺りか…』と思い巡らしたりもしますが、眼前のモダンな風景からは、貧乏学生が主役だった当時の雰囲気を描くのはなかなかの難事です。拡張現実感（AR）などはこうした思い出再現支援に有効なのでは一と夢想している今日この頃です。

埼玉大学創立60周年を機に

理工学研究科長 山口 宏 樹

埼玉大学60年の歴史にあって、大学院理工学研究科の歴史は浅く、20年あまりでしかありません。もっとも、その前身は昭和48年設置の工学研究科（修士課程）および昭和53年設置の理学研究科（修士課程）ですので、これらを含めれば、それなりの年を重ねていることになります。

平成元年4月、埼玉大学と地理的に隣接する理化学研究所の協力を得て、我が国初の所轄省庁の異なる機関と連携した特徴ある大学院として、理工学研究科は誕生しました。博士前期課程は理学系5専攻、工学系6専攻、博士後期課程は物質科学専攻、生産情報科学専攻、生物環境科学専攻の3専攻でスタートし、社会のニーズに対応して、平成6年には博士後期課程に情報数理科学専攻が、平成7年には博士前期課程に環境制御工学専攻が加わり、さらに平成14年には環境制御工学専攻が博士後期課程まで拡張されています。

理工学研究科の短い歴史にあって大きな出来事の一つは、平成18年4月の大学院重点化です。教育組織と研究組織を分離し、それまで理学部・工学部に所属していた教員を理工学研究科研究部に集約するとともに、教育部として博士前期課程6専攻13コースと博士後期課程1専攻6コースに改組。専門性の深化だけでなく、理工融合・学際研究を推進する体制をさらに強化しました。学内の脳科学融合研究センターおよび環境科学研究センターとの連携による先端研究の推進、さらには、理化学研究所に加え、産業技術総合研究所、埼玉県環境科学国際センター、埼玉県立がんセンター臨床腫瘍研究所との連携によって、社会の要請する広範囲の教育研究を可能としています。

このように理工学研究科は順調に成長し、研究者の自由な発想に基づく基礎研究を重視しつつも、成果を人類社会に還元する科学技術を目指して、研究に、そして人材育成に成果を上げてきました。また、博士後期課程での留学生比率が38%、日本人の国外就職者比率も4%と他大学に比べて高く、国際性に富んでいることも個性の一つになっています。

では、理工学研究科の次の10年、否、5年は？

国立大学は法人化後6年を経過し、第2期中期目標・中期計画期間に入りました。創立61年目の埼玉大学では、第1に知の府として普遍的な役割を果たすこと、第2に現代が抱える課題の解決を図ること、第3に国際社会に貢献すること、を基本方針として掲げています。一方、我が国全体で見れば、22年度は第3期科学技術基本計画の最終年度に当たり、文部科学省科学技術・学術審議会において次期重要政策が検討されています。そこでは「科学技術イノベーション政策」を掲げて基礎科学力の強化と重要な政策課題への対応を車の両輪として位置付け、関連する研究開発システムの改革を含め、その推進を図っていく必要が指摘されています。このような学内外の状況からして、理学・工学の融合と連携によるシナジーを狙った理工学研究科が担うべき重責は明白です。理工学研究科長として、一教員として、さらには一同窓生として、積極的かつ着実にその責務を果たしていきたく思います。

●インタビュー

兵藤 釗 元埼玉大学学長（現：成城学園学園長）のお話

聞き手：経和会理事 柳沢ひとみ

場 所：成城学園学園長室

日 時：平成 22 年 3 月 24 日

柳沢：同窓会連合会では埼玉大学創立 60 周年を記念して記念誌を発行することになりました。

平成 15 年に当時の兵藤学長と伊藤正昭経和会会長との間で同窓会連合会の設立が話し合われ、5 学部から委員を出して設立委員会が立ち上り規約を作成、同年 12 月 6 日に同窓会連合会が設立されたと記録があります。この頃は、国立大学の法人化に向けた動きが活発化し、群馬大学との統合問題が浮上するなど、お忙しい時期ではなかったと思います。本日はどうぞこのあたりの経緯などをお聞かせください。当時の伊藤会長と、同窓会連合会設立についてどのようなお話をされたのでしょうか。

兵藤：伊藤経和会会長から「埼玉大学には、学部同窓会がある学部と学科単位同窓会しかない学部があるが、国立大学の法人化に備えて大学全体の同窓会連合会を立ち上げ、大学をバックアップしたい」という話がありました。私も伊藤さんの考えに賛成で、学部長会議などで「同窓会連合会をつくろうという話があるが、大学としても応援したらどうか」と話したと記憶しています。当時、学部単位同窓会としては、経和会を別とすれば、教育学部の教友会、教養学部のけやき会がありましたが、教友会は旧師範学校の卒業生と教育学部の卒業生が一体となった組織で、師範学校の卒業生を会長として活動していました。この際、学科単位同窓会しかない理学部、工学部にも学部単位同窓会を立ち上げ、大学全体の連合会をつくり、卒業生と大学をもっと強く繋げていきたいと思っていました。

柳沢：国立大学の法人化についてはいかがだったのでしょうか。

兵藤：1999 年 9 月、文部省は有馬さんが文部大臣の時に法人化賛成に踏み切り、2001 年 6 月には、遠山敦子文部科学大臣が「国立大学の構造改革方針（遠山プラン）」を発表するなど激動の時代で、非常に忙しくなりました。法人化それ自体には問題はないとしても、行政改革の波に飲み込まれ大学の沈滞を招く恐れがあるが、大学サイドにはこれに抵抗する力はとてもないのではないかと。そんななかで私は、法人化は受け入れ、教育・研究の場の疲弊を回避する途を探るほかはないのではないかと考えていました。いろいろ努力はしたのですが、現実には、法人化しても大学の予算を減らさないと言っていた文部省も財務省に押し切られ、運営費交付金は毎年 1% ずつ減らされることになりました。

柳沢：群馬大学との統合問題についてお聞かせいただけますか。

兵藤：「遠山プラン」が発表された年の秋、国立大学協会の総会で隣り合わせに座っている群



馬大学の赤岩英夫学長から「相談したいことがある」とささやかれたのが最初でした。12 月になって赤岩さんから群馬大学としては埼玉大学との統合を進めたいという話がありましたが、私としては、県内唯一の国立大学たる埼玉大学としては独立独歩で前進を図りたいという旗を掲げて 2 期目の学長選挙で再選が決まったばかりのところで、どうしたものか当惑しました。学部長を個別に呼んで意見を聞きましたが、絶対反対という意見はなかったので、両大学の間で学長懇談会を設置し、まずは統合にメリットがあるかどうかを検討することとしました。両方にある教育学部や工学部はどうか、1～2 年次の導入教育はどこでやるかなどということを巡って、月 1 回のペースで開き話し合いを進めました。翌年 10 月末には、学長懇談会としては統合にメリットありと判断し、統合協議の場を設置することを両大学の評議会に提起しようというところまで、話は詰まってきました。埼玉サイドでは、土屋義彦知事からは、いずれ道州制になるのだから統合もいいのではないかと、工学部は県内に残すようにしてもらいたいとの話がありました。しかし、群馬サイドでは、群馬大学の教育学部の先生や OB が教育学部を埼玉に移すのは反対ということで署名活動を始めており、県知事も反対に動くということがあって、協議会設置は寸前でストップということになりました。これは群馬サイドのせいというだけでなく、埼玉大学の先生方も東京に顔が向いていて、群馬大学との統合には冷ややかな空気が流れていましたから、しょせん難しかったということかもしれません。

柳沢：最後に、国立大学では学部同窓会が中心で、同窓会連合会がある大学は現在でもまだ多くはありません。また、教育機構棟にお借りしている同窓会連合会の事務室は、現在、連合会の貴重な活動拠点として大変助かっています。当時の大学執行部の同窓会に対する意見はどのようなものだったのですか。

兵藤：特に貸与に関して反対は無かったと思います。私自身、設備や場所の提供は当然の事と思っていましたし、大学と卒業生の結びつき強化を考えれば、今後とも大学が同窓会の活動をバックアップしていく必要があると思います。

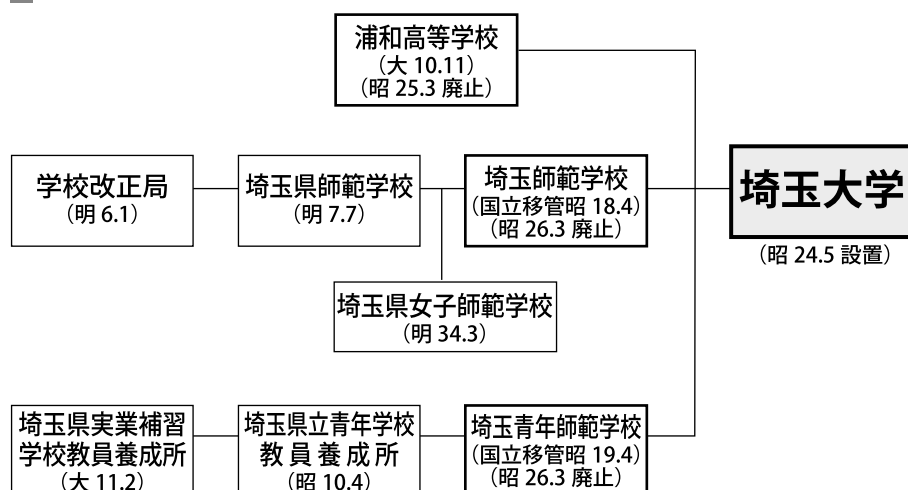
柳沢：本日は貴重なお話をお聞きかせいただき感謝しております。ありがとうございました。

プロフィール

兵藤 剣：平成 10 年 4 月～16 年 3 月まで埼玉大学長。専門は労使関係・社会政策。現在、成城学園学園長。

柳沢ひとみ：経済学部（昭和 60 年卒）。日本電気(株)退社後、イタリア留学、現在通訳・翻訳業。

埼玉大学 沿革



歴代の学長

(初代)	新関 良二	昭和 24.5	～	29.8
(2代)	遠藤 隆次	昭和 29.8	～	35.8
(3代)	藤岡 由夫	昭和 35.8	～	41.8
(4代)	和達 清夫	昭和 41.8	～	49.2
(5代)	岡本 舜三	昭和 49.3	～	55.2
(6代)	須甲 鉄也	昭和 55.3	～	61.2
(7代)	竹内 正幸	昭和 61.3	～	平成 4.2
(8代)	堀川 清司	平成 4.3	～	10.2
(9代)	兵藤 釦	平成 10.4	～	16.3
(10代)	田隅 三生	平成 16.4	～	20.3
(11代)	上井 喜彦	平成 20.4	～	現在



埼玉大学開学式 1949 年 11 月 3 日



北浦和キャンパス正門 1967 年頃



常盤キャンパス (教育学部) 1963 年頃



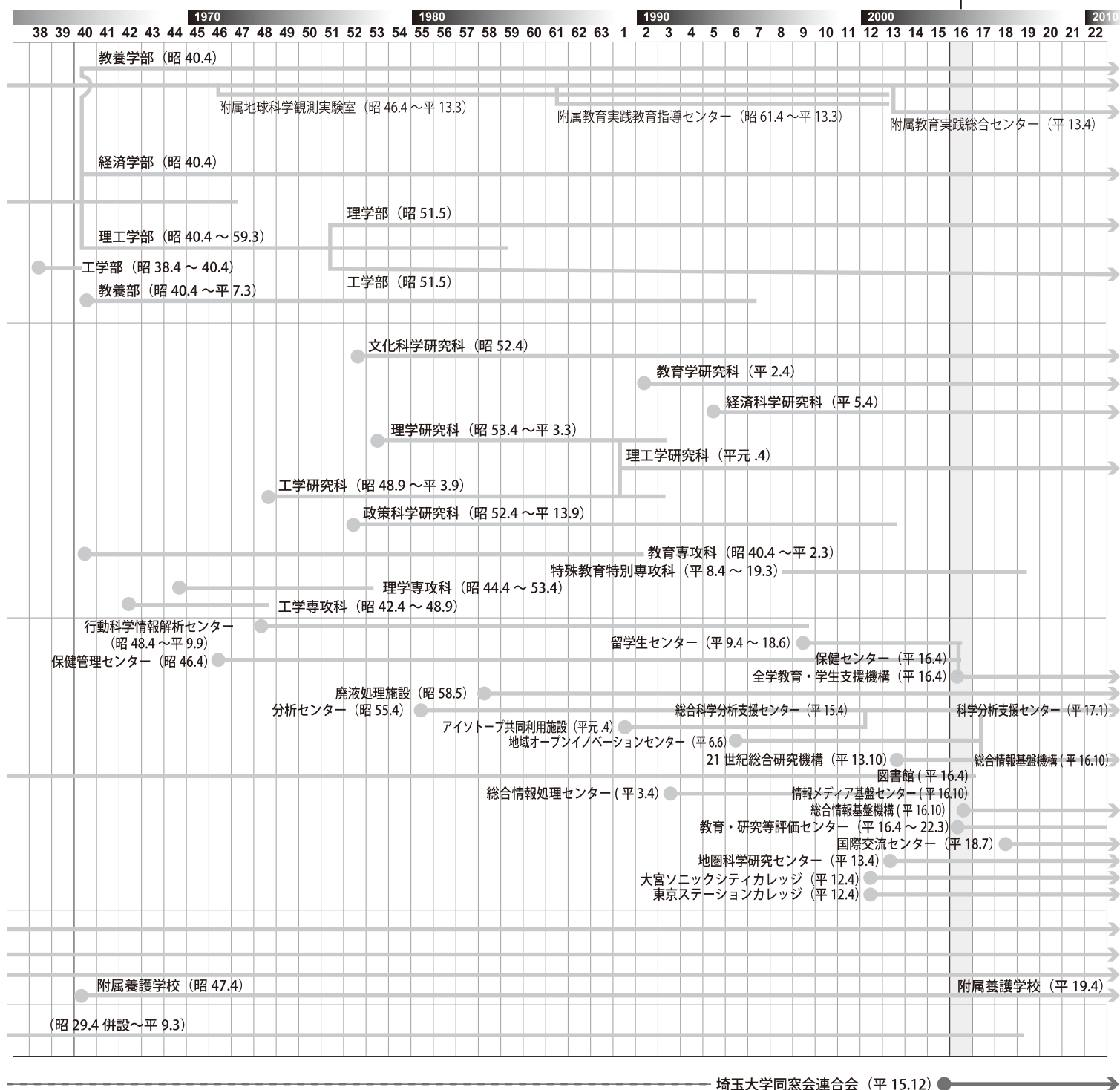
建設途中の大久保キャンパス 1970 年

年度	1950												1960									
	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37								
学部・学部付属施設等	教育学部（昭 24.5）																					
	文理学部（昭 24.5 ～ 47.3）																					
大学院・専攻科																						
機構・学内共同研究施設等	附属図書館（昭 24.5）																					
附属学校																						
短大																						
同窓会																						

日本は戦後、主権の維持、平和の擁護および基本的人権の尊重を基本原理とする「日本国憲法」(昭和 21 年 11 月 3 日公布)において、学問の自由と教育を受ける権利を明確に規定した。この新憲法に精神に則り、教育の基本を確定するために「教育基本法」(昭和 22 年 3 月 3 日)が制定された。これと時を同じくして、「学校教育法」が制定され、学校制度の基本構造が決定された。即ち、いわゆる 6・3・3・4 制度である。この法律に基づいて、昭和 23 年の春から、1 校の公立と 11 校の私立大学が新しく発足することとなった。また、翌 24 年度からは、国立大学を含む多くの新制大学が発足することとなった。わが「埼玉大学」の創設もこれに含まれている。

「国立学校設置法」(昭和 24 年 5 月 31 日)と「国立大学設置法施行規則」(昭和 24 年 6 月 22 日)が公布され、新制国立大学 69 校が制度上、正式に発足した。この「設置法」において、現在の「埼玉大学」の名称が確立し、東京大学との合併案、千葉大学との合併案等紆余曲折はあったものの、国の 1 県 1 大学原則の下に、本学は「文理学部・教育学部」の 2 学部を置き、「浦和高等学校・埼玉師範学校・埼玉青年師範学校」を包括して発足することになった。本学の設置許可(昭和 24 年 3 月 18 日)、初代学長として新関良三氏が発令(6 月 1 日)、第 1 回入学試験(6 月 8 日)、第 1 回入学式(7 月 16 日)があり、本学開学記念式(11 月 3 日)が執り行われた。

文理学部は昭和 40 年 4 月 1 日に改組して、本学には教育学部の他に、経済学部、理工学部、教養学部の 3 組織が新たに誕生した。文理学



部は在籍中の学生が全て卒業するまで存続し、昭和47年3月31日に至って廃止となり、昭和24年から23年間続いた歴史に終止符を打った。以後、文理学部の発展的改組などを経て現在に至っている。

工学部の新設(昭和38年4月1日:機械工学科・電気工学科)は第三代学長の藤岡由夫氏による「埼玉大学将来計画の構想」の実現第一段階で、埼玉大学改組、学部拡充と密接な関係がある。文部省は改組、学部拡充は文理学部改組を前提としていたが、折しも、我が国では理工科系の人材不足が叫ばれ、また埼玉県側からも将来工業県・首都の衛星県として果たす役割を配慮すると、地元としても工学部の新設が強く望まれた。このような事情の下、文部省は工学部設置は文理学部改組を絶対条件としたが、改組を後回しにして本学に工学部を設置する方針を決め、工学部が改組する(昭和40年3月31日)まで2年間の間工学部として存続するが、改組し更に、理学部と工学部に改組する(昭和51年5月)まで19年間(昭和40年4月～昭和59年3月)理工学部は存続したことになる。理工学部は昭和51年5月改組し本学は教育・教養・経済・理学・工学の5学部体制で現在まで推移している。

大学院・専攻科の面では、工学研究科(昭和48年9月)、教育専攻科(昭和40年4月)を皮切りに数多くのコースが用意されている。また、機構・学内共同研究施設の面では、近年、大宮ソニックシティカレッジ(平成12年4月)、東京ステーションカレッジ(平成12年4月)が開校するなど拡充されつつある。

埼玉大学 大学歌

作詞 遠山 悟

作曲 横島 浩

一、知の拳もて

時代の波濤に漕ぎ出でんと
集へる者に力あれ
緑なす武蔵野はるか
見すえる未来想うとき
われら蒼天に立つ
埼玉大学わが母校

二、思索の翼

歴史の溪谷を越ゆるため
翔く者に光あれ
学舎は大川に沿い
樺吹く風浴びるとき
われら陽炎に立つ
埼玉大学わが母校

三、夢の彼方へ

新たなる知の潮汲む
いま若人に望みあれ
友愛と自由の森に
遥かなる富士見ゆるとき
われら疾風に立つ
埼玉大学わが母校

maestoso

歌

maestoso

ピアノ

1. 知の
2. 翼を
3. 夢を

こころも一て じだい 的 なみにこぼれんとつ
一のつは一き れきし 的 たにをこ一得るためは
新一な一へ 新らた なるちのうしおく一知

11

ど えるも一にちから あれ みどりのすむま
ば たくも一にひかり あれ まなびやはおどけ
ま わに一ど一たのぞみ あれ 伸うあいたじけ

16

しのはる一か みすえるみらい おもうとき われらそうてんに
かわにそーい けやきふくかぜ あびるとき われらようえんに
うのもりーに はるかなるふじ みゆるとき われらしつぷうに

21

たつ たつ きいたま だいがく きいたま だいがく わがほこう
たつ たつ きいたま だいがく きいたま だいがく わがほこう
たつ たつ きいたま だいがく きいたま だいがく わがほこう

編集後記

むつめの名前の由来は、埼玉（さきたま）古墳から見つかった勾玉（まがたま）および仲睦まじい（なかむつまじい）から来ているようです。

昭和24年に創立されました埼玉大学の60周年をお祝いし、同窓会連合会としてなにか記念に残る事業を行おうとの熱き声に動かされ、今年の代議員総会で決議し、今年61回を迎えるむつめ祭の時期にこの記念誌を発行することができました。同窓会連合会として初の試みです。5学部の卒業生ならびに学長、学部長などにも寄稿をお願いし温かいご協力を得て、ここにご披露することが出来ましたことを嬉しく思っております。創立から60年の間には、学部再編、キャンパス移転、学生運動など様々な出来事があり、また、研究の最先端をいく脳科学融合センターが生まれ、大学歌が誕生し、正門広場にはモニュメントが聳え立っています。学内にはコンビニが営業し、大学生協には埼玉大学饅頭が売られています。年々進化を遂げる埼玉大学の発展を願って全学挙げての同窓会活動を活発に行い、大学を思う熱き思いをしっかりと後輩に受け継いで行きたいと思っております。最後にご寄稿いただいた皆様、編集にご協力いただいた皆様、ならびに快く発行をお引き受けいただいた株式会社埼玉学術事業会に心より御礼申し上げます。

同窓会連合会事務局長 田坂記

埼玉大学創立 60 周年を迎えて 埼玉大学同窓会記念誌

2010 年 10 月 1 日発行

編 集 埼玉大学同窓会連合会事務局

発 行 埼玉大学同窓会連合会

〒338-8570 埼玉県さいたま市桜区下大久保 255

電話 048-858-9218

<http://www.alumni.saitama-u.ac.jp>

e-mail : dousou@mail.saitama-u.ac.jp

